

ご注文は思い出ですか？

雷王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

香風（かふう） 玲央（れお）は世界中を旅する編集記者である。彼は過去に”ある子”との”約束”を忘れてしまい、彼はそのこずつと後悔していた。

そんなレオはある日、仕事の都合でその”約束をした子”が住んでる”木組みの家と石畳の街”にやって来ることになり……。

これは、レオと木組みの街で暮らす住人達との出会いとほのぼのとした物語である。

.....つとこんな感じの物語です。

構成的には、原作やアニメを元にした物や、私自身が考えたオリジナルストーリーなどを載せていこうと思いますので、好みじゃない方、気に入らない方はブラウザバックを推奨します。(ちなみに処女作です。)

そして投稿期間ですが、なるべく早期投稿を目標にしますが、私自身飽きっぽいので不定期になるかもしれませんので先に謝っておきます。申し訳ありません。

それでもかまわないって方は、ありがとうございます。どうぞ最後までお付き合いください。

俺の名は香風（かふう）玲央（れお）。年齢23才。

今から”木組みの家と石畳の街”に行くために列車に乗っている。理由は二つ。一つは自分の仕事の関係でその街の編集社の所に行くためである。そしてもう一つ、これが俺がああの町に行く最大の目的……いや、前者の理由ができたからこそ、俺はその目的を果たそうと思ったのだが……。しかし、俺は行かなければならない。”自分の犯した罪にけじめをつけるために”……。

遡ること一週間前、俺はある人に電話をかけた。

「はい、香風です。」

出てきたのは紳士的な男性の声だった。昔のことであろう覚えだが間違いない。この人は俺の叔父の香風（かふう）タカヒロだ。しかしちよつと自信なさげに尋ねる。「もしもし、えつと…タカヒロさんですか？」

「!?君はもしかして…。」

「はい。甥のレオです。」

「おお！レオ君か！久しぶりだね。もう十年にもなるかな？元気そうで何よりだよ。」

「はい。叔父さんもお元気そうで…。」

俺は思わず途中で言葉を切った。

「ん？どうしたんだい？レオ君。」

「俺、叔父さんに謝らないといけないことが…。」

タカヒロ「……君の事情は弟……君の父親から聞いている。君が謝る必要は、どこにもないよ。」

「……でも俺は……」

「君は君のやるべきことをやっていたんだ。何一つ悪いことをしてないさ。」

俺は叔父さんの言葉にただうなだれるしかなかった。

俺はとんでもない罪を犯したというのに、叱責されるどころか逆に慰められてしまった。でもわかっていた、謝らなければいけないのは叔父さんではない。本当に謝るべきなのは、叔父さんではないのだから。

そして俺は最も問いたかったことを口にした。

「あの……叔父さん……あの子……は……、はどうしていますか？」

叔父さんは、しばらく沈黙した後答えた。

「大丈夫。」あの子」は元気にやっているよ。」

俺は久々に安心という感情を得た。

「そうですか！良かった」

「ただ…」

「…ただ？」

「残念なことに、あの子は君のことをすっかり忘れてしまったようだよ。」

「えー…そう…ですか。」

俺はショックを受けると同時にどこかほっとしていた。もし”あの子”が俺のことを覚えていたら、どんな顔をして会えばいいかわからない。

だが、だからといってこのままなかつたことにするわけにはいかない。俺が叔父さんに電話をしたのには訳がある。

「実は、今回は叔父さんにお問い合わせがあつて電話したんです。」

「お願い？」

「はい。実は俺、叔父さんのいる町に仕事で行くことになったんです。」

「へえ。そうなのかい。」

「そこでその間、叔父さんの喫茶店でお世話になりたいと思つていますが……。」

「そうか……。だが一つ問題がある。」

「……あの子」ことですよね。」

「ああ。さつきも言ったように”あの子”は君のことを忘れてしまつてゐる。過去に会つたことがあるらしいが記憶にないとすると”あの子”も君との接し方に頭を悩ませるだろう。仮に思い出したとしたらなおさらだ。私は父親として、”あの子”の苦しむ姿を見たくないんだよ。もうこれ以上ね……。」

やっぱり叔父さんは心のどこかで俺と”あの子”を引き合わせたくないのだろう。叔父さんの気持ちはよく分かる。でも俺の意志は変わらない。俺は本心を叔父さんにぶつけた。

「それも承知の上でお願いします。俺、”あの子”にもう一度会いたいんです。会つて俺のことを思い出してもらつて、心の底から謝りたいんです。」

「……………」

「俺、”あの子”とこのまま会わずに全部なかったことにするなんてこと、したくないんです。もうこれ以上後悔をしたくないんです。別に許しを乞いたい訳じゃなくて、ただ……」

「レオ君。」

「はい?」

俺が思いつく限りに言葉を並べていると、叔父さんが急に話しを切り出した。

「確かに君の言っていることが正しいよ。それに、これは君だけの問題じゃなくて、”あの子”の問題でもあるんだ。」

「叔父さん……」

「そして、君達が昔の二人に戻って来ることを私は望んでいるし、私の家内もそうなることを望んでいるだろう……」

叔父さんは、またしばらくするとこう言ってきた。

「…わかった。君を歓迎するよ。」

「ホントですか？ありがとうございます！」

「それで、いつになったら来るんだい？」

「今もう日本について空港近くのホテルに泊まっています。」

「そうか…では、ここに来るのは、明後日にぐらいになるかな？ この辺りはあまり交通整備があまり整っていないが、バスや列車を乗り継げば2日ほどで着けるだろう。」

「そうなんですね。あ、でも実は…」

その後、俺は叔父さんと色々な打ち合わせをして電話を切り、明日の出発に備えてホテルのベッドで眠りに着いた。

そして一週間後、現在にいたる。

どうして2日しかかからない所を一週間もかかったのかは、後に語るだろう。

そんなことを思い出しているうちに、窓の景色が草木などから、だんだん木製の建物に変わっていた。気付けば列車の速度も徐々に、減速している様だった。さすがに街の中一つ一つ覚えていく訳ではないが間違いない。ここは10年前、俺と”あの子”が出会い、短期間一緒に過ごした、”木組みの家と石畳の街”だ。

列車が止まり、俺は駅の外に出た。やはり街の中はほとんど変わった様子はなく、とても懐かしい気分になった。

「……よし。」

俺は大きく一と深呼吸して、駅の出口から街の中へ大きな一歩を踏み出した。”あの子”と再会するため、そして、まだ見ぬ出会いや思い出を求め、俺、香風 玲央は今、十年ぶりに”木組みの家と石畳の街”へやって来たのだ。

「行こう。」ラビットハウス」に。」

↳
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
↳

～お客に渡す時より、練習した時の方がコーヒー豆を多く消費するのは喫茶店としてだろう。～

order1

～お客に渡す時より、練習した時の方がコーヒー豆を多く消費するのは喫茶店としてだろう。～

俺の名前は香風 玲央。

俺は現在、“木組みの家と石畳の街”にやって来た。(事情は略。)まずは、“ラビッツハウス”と言う喫茶店に向かおうと、俺は意気揚々と駅から歩き出し、三步ほど歩いた所である重大なことに気付いた……

「……ラビットハウス” って何処にあるんだっけ？」

……無理もない。俺が以前この街に来たのは、十年も前の事だ。街の中も場所もうろ覚えで、ましてやこの中から一つの喫茶店を一人で見つけるなんてほぼ不可能だ。”

木組みの街”はそう狭くはない。一週間前に叔父さんから”ラビットハウス”の場所を聞くのをすっかり忘れていた。多分、叔父さんも俺が場所を知っていると知っているのだらうから迎えに来る筈もない。それに叔父さんにだって、喫茶店での仕事がある。

この街には他に知り合いもないため……

～お客に渡す時より、練習した時の方がコーヒー豆を多く消費するのは喫茶店としろろう。～

「はあ……どうしよう……。…」

…俺は空を仰ぎ、そう眩やきながら途方に暮れた。

“ここは喫茶店”ラビットハウス”。

（今店内では、保登（ほと） 心愛（ここあ）、香風（かふう） 智乃（ちの）、天々座（てぎ） 理世（りぜ）の三人が働いている。とはいっても店には一人もお客がいなくて暇

なので、ココアとチノはリゼの指導の下でラテアート練習をしていた。

「できた〜！ リゼちゃん見て！見て！」

とココアが監督のリゼを呼ぶ。

「おつ、どれどれ？……ん？」

リゼが見たココアのラテアートは、コーヒーの中にミルクで描かれた白くてモコモコした物体だった。

「おいココア、これは何だ？雲か？それとも綿菓子？」

「えっ、違うよ。これはティツピーだよ。」

ティツピーとは、この喫茶店の看板兔のアンゴラウサギの事である。実はティツピーは、この喫茶店のマスターであったチノの祖父の魂が乗り移っている。が、その事を知ってるのは、チノとその父親のタカヒロだけである。

「あーなるほど、確かにこのモコモコした所が……ってどれも違いはないし、これは簡単すぎるじゃないか！」

リゼの連続ノリツツコミが炸裂する。

「えへへ〜」

リゼのツツコミに対してココアは何故か照れ笑いをする。

「リゼさん、私も出来ました。」

～お客に渡す時より、練習した時の方がコーヒー豆を多く消費するのは喫茶店とし
だろう。～

リゼがやれやれと言いながらチノの作品を見てみる。

「……………」

チノの作るラテアートもまた、不気味な人の顔をしたラテアートだった。まるで、たくさんの芸術品とその独特な作品で注目を集めた、やたらと名前の長い芸術家の様なラテアートだった。芸術が分かる人ならまだしも、とても一般客が飲みたがる物ではない。

（二人共、商品として出すにはほど遠いな。）

そう思いながらリゼは肩をすくめた。

（いや…だがしかし、ここで投げ出しては、指導者（教官）の名が廃る…）

その瞬間、リゼの中の指導者（教官）魂に火が着いた。ココアとチノの二人は、そんなリゼの様子を察し、身の危険を感じたがもう遅い。

「お前達！徹底的に鍛えてやるから覚悟しろ！」

「サー！！イェッサー！！」

ココアとチノの二人は反射的に敬礼をして返事をする。

「声が小さい！！」

「サー！！イェッサー！！」

ここでリゼ教官による、ココアとチノのラテアートの猛特訓が始まった。

(まったく、騒がしいのお。こんなので果たして店に客が来るのかのお。)
今度はカウンターの上で一部始終を見ていたティッピーが途方に暮れていた。

レオside

俺はしばらく考えて、ひとまず、俺がこの街で働く編集会社に行くことにした。幸い、会社の場所は前もって聞いて、メモしておいたため、道順は分かっている。そこであわよくば、“ラビットハウス”の場所を知ってる人に道を尋ねようと思い、俺はメモを便

りに会社への道を急いだ。

数十分後：

「今日からしばらくお世話になります、香風玲央です。よろしくお願いいたします。」
俺は編集会社の社内に入り、社員達に挨拶した。その後、会社の説明や、今後の打ち
合わせなどを済ませ、今日の出勤は終了した。俺は会社の出口で社員の一人に、「ラ
ビットハウス」の場所について聞こうと思ったその時、

「あら？もしかして、レオさんではないですか？」

聞き覚えのある女性の声でした。俺はそんな筈はないと、ゆっくり振り向いた。

ラビットハウス side

一方その頃、

「だから違う！もつとこう…的を狙うイメージ脇をしめるんだ！」
厳しく指導するリゼ。

「サー♪イエツサー♪」

歌う様に返事をするココア。

そしてチノにも、

「チノ！また絵の形がおかしくなってるぞ！ もう一度やり直しだー！」

「まっまたですか？」

リゼのラテアート特訓は熾烈を極めた。チノはもううんざりの様だが、ココアはこの状況を何故か楽しんでいる様だ。

一方で、チノの父、香風（かふう） タカヒロは喫茶店の二階の自室の窓付近でそわそわしていた。

（そろそろ来てもいい頃なのだが…何かあったのだろうか…）

「どうやら、レオが”ラビットハウス”にまだ現れないため、心配し始めた様だ。

（探しに行きたい所だが、そろそろ、バーの支度をしなければならぬし、チノ達にはまだ内緒にしておきたいから、あの子達を行かせたくはないし…じゃあ親父を行かせ…

～お客に渡す時より、練習した時の方がコーヒー豆を多く消費するのは喫茶店とし
だろう。～

いや、駄目だな。どうしたものか…。)

そう思いながら、タカヒロもまた途方に暮れた。

レオ side

突如、誰かに名前を呼ばれ、振り返って見ると、そこにいたのは、同じ編集社の小説家、青山（あおやま）ブルーマウンテン（本名・青山 翠（みどり））がそこに立っていた。青山は三年前、俺がこの編集社に入社した少し後に小説家デビューした。俺も少しそれに関わっている。そのため、青山は俺に色々と話しかけられたりされたのだが……

「やつぱりレオさんですよね？ 久しぶりですねぇ。二年ぶりでしょうか？ いつ帰って来たんですか？」

会って二言目でこの質問攻めである。はつきり言って俺は青山が少し苦手だ。なぜかというところ……

「おう。久しぶりだな、青山。一週間前に日本に帰って来た所だよ。にしても、どうしてここに居るんだ？ 三年前は本社の方にいただろ？」

と一オクターブ下がった声で返事した。

「はい、でも実はこの街が私の地元なんです。ここの方が筆が乗るんですよ。では、レオさんもどうしてここに居るんですか？」

「あーまあ色々あって、しばらくここで編集の仕事をするんだよ。」

すると青山は目を大きく見開いて両手を合わせた。

「ではレオさんの旅の事が記事に乗るんですね！それは楽しみですね。そうだ、レオさんこれから用事はありませんよね。でしたら旅の事を是非聞かせてください。小説の参考になるかもしれませんし。私、近くに良いお店を知ってるんです。”甘兔庵”っていう所なんですけど、あそこのお茶と和菓子は美味しいですよ。」

(不味い。)

このまま青山のペースに持って行かれるととても不味い。

俺が青山を苦手な理由、それは、青山はマイペースでつかみ所がないため、三年前、俺が旅に出るまでかなり振り回され、それはそれは苦労した。今後のために親睦を深めようとしたり、小説の物語を一緒に考えて欲しいと言ひ、あちこちの店に連れて行かれた。その度に何故か俺が奢る羽目になり、休日もろくに休めなかつた。今ここで断らければ、三年前の過ちを繰り返すことになる。

「あついや、そうしたいのは山々だけど、実はこれからまだ用事があつて…」

俺はなるべく青山ががっかりしないように、丁寧に断つた。

「あら？ そうなのですか？ それはとても残念です。」

青山は少しがっかりした様な顔をした。

青山には悪いが生憎俺は、何か奢れるほど金を持っていないし、別に嘘はついていない。俺はこれから探さないといけない所が……あつ。

「青山。お前、ここが地元だつたつて言つてたよな？」

「はい。確かに、この街は私の地元ですけど…。」

「だったら、”ラビットハウス”っていう喫茶店知らないか？探しているんだけど…。」

この時、俺は初めて青山の驚いた表情を見た。

「えっ！ラビットハウス”……です……か。……はい、知ってますけど…。」

「ホントか？良かった。それじゃあ道を教えてくれないか？」

「はい、いいですよ。」

こうして俺は青山から”ラビットハウス”の道を教えてもらい、会社の出口へ向かった。

「ありがとな、青山。後でお礼はするよ。」

「いえいえ。お構い無くあつてもどこかの

お店で旅の話しを聞かせてもらいますからね。」

「うっ…。」

どうやら俺は青山の魔の手からは逃れられていなかったらしい。

「ああ、考えておくよ。じゃまたな。」

「はい、どうかお気をつけて。」

こうして俺は会社を出て、”ラビットハウス”へと道を急いだ。

～お客に渡す時より、練習した時の方がコーヒー豆を多く消費するのは喫茶店と
だろう。～

(そう言えば、青山と話している時、気になることを言っていたな。)
そう、俺は青山が話していた中で、”ある事”が気になっていた。
それは……

”甘兔庵”と言う店の事だった。

(この街に甘味処みたいな所があったんだな。十年前は、”ラビットハウス”し
か喫茶店を知らなかったからな。)

そして俺は、いつかその店に行ってみよう思いながら”ラビットハウス”に向かっ
た。

「せっかく三年ぶりに会えたんですから、もう少し、お話していたかったですけどね…。」

社内に一人取り残された青山は寂しそうに呟いた。それにしても、レオの口から”あのお店”の事を聞くことになるとは思ってもいなかった。

”ラビットハウス”：久しぶりに聞きました…。マスターはお元気になっているでしょうか?”

その呟いやきながら、青山は昔の事を思い返すのだった。

i n u e d

to b e c o n t

order 2 くやって来ました!ラビットハウス!く

ラビットハウス side

「……よし。大分上手くなったな。今日はもうこれくらいで良いだろう。」

ラテアート特訓開始からおよそ二時間、二人はようやくリゼ教官から合格サインをもらった。

「よ、ようやく終わりましたね……。」

チノはとても疲れきった表情をしていた。

「でもリゼちゃんのお陰でラテアートがとても上手になったよ。」

(そりゃあ、二時間もやっていたら、嫌でも上手くなるじやろうて。)

ココアの言葉にティツピーはそう思いながら嘆息した。

「ああ、特にココアはよく頑張っていたな。もう少し練習すれば、お客さんに出しても大丈夫だろう。」

「ティツピーーーーー!」

チノの声が客が誰もいない店内に響いたその時、扉のドアノブが反時計回りにひねられた。

レオside

「……………」

目的地に近づけば近づくほど自分の足取りが重くなっていく様な気がする。青山に教えてもらった道順が正しければ、もうすぐ「ラビットハウス」が見えてくるはずだ。しかし、俺はその距離が一步一步縮まって行くごとに、俺の中にある不安が徐々に大きくなっていく様な心境だった。もしかしたら、俺は心の何処かで「あの子」に会うのを恐れているのかもしれない。「あの子」に会ったらず、何を話せば良いだろうか、どの様に接すれば良いだろうかなどと考えれば考えるほど気が滅入る。だが、今さらくよ

くよしても仕方ない。俺は自分の“過去”と向き合うために来たのだ。いい加減覚悟を決めなければならぬ。そうこう考えている内に俺はいつの間にか“Rabbit House”と書かれた垂れ看板の前に立っただけだ。

(えっ！ウソ！もう着いたのか?)

そして俺は、視点を看板から、それが吊るされてあつた建物に変えた途端、目を大きく見開いた。

(知ってる……。いや、覚えてる。やつぱりこが“ラビットハウス”だ！)

俺は、十年前と比べ、その全くの変わりようのなさにまるで過去に戻つて来たかの様な心地だった。

俺はしばらく、店の周りを見回した。

(ホントに外は何も変わつてないな……。でもなんか店内が騒がしい感じがするが気のせいかな?)

俺は不思議に思いながら、店の扉の前に立った。

心拍が上がっているのを感じる。もし、扉を開けて、一番最初に“あの子”と鉢合わせたら……と思うと、どうしても足が竦んでしまう。

(そういえば、十年前もこうやってなかなか入ろうとしなかったっけ。)

そう思い返しながら、俺は苦笑いをした。それに何故か、今は扉を開けてはいけぬ

と、俺の勘が訴えている。

(……いや、それは俺が、あの子に会うことに緊張しているだけだ。もう覚悟は決めたんだ……。)

俺はドアノブに手をかけ、大きく息を吸い、吐き出した。

(……よし。)

俺はドアノブを時計回りにひねり、扉を開けた突如、

「ティツピー……!」

と言う女の子の声が聞こえてきて……

「えっ?」

俺の顔面に何やら白くモコモコした物体が高速で直行して来る。

(……………やっぱり、もう少し時間を置いてから入れれば良かった……………。)
などと思っているうちに、俺の視界は一瞬にして暗くなつて……………

そして、物語は交錯する……………。

ドサツ!

俺は、その威力に逆らえず、そのまま後ろに倒れてしまった。

「いつてててててー」

後ろ向きに倒れたが、幸い背中にリュックを背負っていたため、怪我をするまでには至らなかった。すると、俺の顔に乗っていた白い物体が一人でに離れて、今度は俺の胸の上に飛び乗った。俺はようやくその白い物体の実体を捉えることができた。

パツと見、白い毛玉だ。だが、よく見ると上の部分に耳の様なものが生えており、真ん中辺りの左右に目の様なものがついている。間違いなく生き物だ。

(と云うか……こいつ、どこかで見たことある様な……。)

そしてティツピーもまた、

(はて?こやつ、どこかで見たことがある様な……。)

人と兎(の中に入った人)が見つめ合っている中、また店内から、二人の女の子が慌てた顔で走って来た。

「お、おい、大丈夫か!」

「お兄さん、大丈夫!？」

と心配そうな表情で二人の女の子が言ってきた。俺も心配をかけないようにと言葉を返そうと思つたが……

「あ、ああ。大丈夫だ……よ。」

俺は途中で言葉を詰まらせた。その理由は、二人の女の子の後ろから、最初の二人よりも更に幼げな女の子が心配そうな顔でやって来るのが目に入ったからだ。

「あ……あの、大丈夫ですか？」

俺はその質問にも答えず、俺はただその子をずっと見ていた。

あの薄い水色の髪に、あの顔、十年前の”あの子”そのものだった。

「あの、どうかしましたか？」

今度は、不思議そうな顔で俺を見始めた。

そして俺は、十年前、この街で一緒に過ごした、”あの子”の名前を口にした。

「チ…………チノ……………か……………?」

「…………えっ…………?」

三人と一匹は驚いた表情を浮かばせた。

その時、

「レオ君? レオ君じゃないか!」

突如、店内から俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

すると、

「レオ? レオじゃと!」

別の方向からも俺の名前を呼ぶ老人の声が聞こえた。が、俺の意識は店の奥の男性に向けていたため、大して気にも止めなかった。男性は、驚きと安心の表情を浮かばせて

いた。俺は、口を開いた。

「お、叔父さん？」

男性：…叔父さんは懐かしそうに答えた。

「ああ、そうだよレオ君。本当に大きくなったね。」

その言いながら、叔父さんは俺の左肩は軽く数回叩いた。

「はい。お久しぶりです。」

「いや、それにしても随分遅かったね。連絡も取れないから心配したよ。」

「いや、すみません。俺も色々ありまして……」

そして、俺と叔父さんはその場で語り合い始めた。

しかし、1、2分後、状況が全く飲み込めていない三人を見て、話しを一時中断した。

「ああ、皆すまない。ココア君とリゼ君は初めて会うね。紹介するよ。彼は香風 玲

央。私の弟の息子で、チノの従兄だよ。」

という叔父さんの紹介に……

「「ええー……!!」」

三人はとて驚いた表情で声を張り上げた。その様子から見て、やはりチノは俺のことを覚えていない様で少し悲しかったが、それをこらえて、俺からも笑顔で自己紹介した。

「初めまして。俺は香風 玲央です。この街には十年前に来て以来で、仕事の都合でまたしばらくこの街で過ごすことになりました。皆、どうかよろしく!」

↳ t o b e c o n t i n u e d ↳

order3　　〈友達と妹？と失敗作〉

その後、叔父さんが詳しく説明したお陰で、三人とも、なんとか理解してくれた（勿論、チノの件は伏せてくれたが…）。

すると突然、桃色の髪と制服を着た女の子が目の前に立って、天真爛漫な笑顔で自己紹介をした。

「初めまして！私は4月からここに下宿してお世話になっていきます、保登　心愛です！　高校一年生で、チノちゃんのお義姉ちゃんでs」

「違います。」

ココアが完全に言い終わる前にチノはさりと否定する。俺はただ「あはは…」と苦笑いするしかなかった。

すると今度は、紫色のツインテールの女の子が何やら申し訳なさそうに近づいて来た。身長はココアよりも高く、どこか大人びた凛々しさもあった。そして、話しくそうにこう言った。

「私は手々座　理世です……。高校二年でこの喫茶店でアルバイトをしています。……その……。ティッピーを投げつけたのは私です……。わざとではないとはい

俺は唇に笑みを作り目を少し細めてこう言った。

「じゃあ俺にも敬語で話さなくてもいいよ。リゼの話しやすい話し方で構わないよ。」

リゼはますます目を見開いたかと思いきや、すぐ目を思いつきり閉じて顔を左右に何度もふった。

「いえいえ！そういうわけにはいかないですよ！だってレオ……さんは私より年上ですし、何より、あんな事をしておいて敬語を使わなくていいだなんて出来ませんよ。」

徐々に話しの勢いが落ちていくリゼ、まだ多少引つ張っているみたいだが、なんとか話題を変えることはできた。俺は両膝に手を乗せ、体重を預けリゼとほぼ同じ目線に立った。

「さん付けもいらさないよ。俺はリゼと友達になりたいんだ。友達に年の差は関係ないし、こんなことぐらい気軽に許せる関係になりたいんだ。」

「と……友達。」

リゼがそう呟いて少しうつ向いている間に俺は元の体勢に戻して、右の手を彼女の目の前に差し出した。リゼは、はっと俺の方を見た。俺は唇を左右に引き延ばしながら……

「これからよろしく、リゼ。」

リゼはしばらく呆然とした顔で俺の顔と差し出された右手を交互に見た。やがてリゼの顔にも笑みが浮かび、彼女も同じ手伸ばして俺の手を握った。

「……ああ、こちらこそ、よろしくな……レオ。」

そうやってお互い笑みをこぼしていると外野から

「ずるーい！私もお友達になりたーい！」

と、怒ってる様で怒ってない様な明るい声が聞こえてきた。声の主は俺の予想どおりココアだった。さつきチノがココアの話しに割り込んできて、その後リゼが話しかけて来たため、俺も挨拶を返せていなかった。

「あ……ああ勿論だよ。これからよろしくな、ココア。」

と言ってココアに手を差し出すと、ココアは両手で俺の手を握り返し満面の笑みでこ
う言った。

「うん！こちらこそよろしくね！レオお兄ちゃん！」

「……………へ？……………お兄……………ちゃん？」

店内にしばらく沈黙が流れた。

「な……なあココア。おまえは俺と友達になりたいんだよな？」

俺が苦笑いしながら問いかけると、

「うん！そっだよ！」

ココアは笑顔で返答する。

「じゃあ、お兄ちゃんって呼ぶのは少し変じゃないかな？」

「だからレオお兄ちゃんは私のお友達でお兄ちゃんだよ。」

「いや、わけわからん。」

突っ込んだのは俺ではなく、リゼだった。俺はそのリゼの言葉に便乗した。

「そっだよココア。俺はココアと出会ったばかりでお兄ちゃんとして振る舞ってないし

それに……………」

俺は誰も聞こえないように小さな声で呟いた。

「……………それに俺は”そう”呼ばれる資格もないから……………」

するとココアはきよとんとして尋ねてきた。

「レオお兄ちゃん、今何か言わなかった?」

「…………いや。何でもないよ。」

さすがに一番近いココアにはかすかに聞こえていた様で俺は一瞬ドキツとしたが、幸い旅の経験で幸か不幸か感情を隠すのが得意になっていた俺はそれ以上感ずかれることはなかった。

しかし、これ以上拒み続けているとなんでなんでと質問攻めされて埒が明かない気がしたので…………

「……………わかった、いいよ。ココアの呼びたいように呼んで。」

「わーい!じゃあよろしくね!レオお兄ちゃん!」

「ああ、よろしく、ココア。」

今日一日で色々と疲れていた俺は渋々苦笑いで了承し、ココアと二回目の挨拶を交わした。

「それにしても、このコーヒーの量はなんだ？」

俺は店のテーブルの上に置かれた大量のコーヒーが入ったカップを見て言った。近づいて見ると、コーヒーにはミルクで絵が書かれている。

「ああ、ラテアートか。」

俺も旅の途中でいろんな喫茶店を見てきたから知っていた。いや、それ以前に十年前に当時のマスターだった俺の祖父が一度俺にやって見せたのを覚えているが、

「こ、これは……」

目の前にあるラテアートはどれも芸術的とはいえなかった。

「ああそれは、チノとココアが作ったやつだよ。さっきまで練習していたんだ。」

とりげが説明する。その後ろでココアは照れ笑いして、チノは顔を赤くしてうつ向いていた。

「あつ、でもねでもね！最後に作ったのはすごく上手に出来たんだよ！」

とココアが言つて、自分の傑作を探して俺の前に差し出した。見て見るとコーヒーの中に白い薔薇が咲いていた。細かい部分まで再現されていて、あの大量の失敗作から比べるととても大きな進歩だった。

「へえ、すごいじゃないか。よく出来てるよココア。」

と俺が褒めると、ココアは「えへへ」と照れていた。そして俺はふとある事を思いついた。

「じゃあ俺も一つ作って見ようかな？」

「「えっ!?!」」

三人の女の子は同時に声をあげた。

「レオ君、ラテアートをした事があるのかい？」

という叔父さんの質問に対して、

「はい、十年前に祖父から少し教わったぐらいですけど……」

と俺は答える。

「いや、ラテアートはそう簡単にできるものじゃないぞ。」

「そうだよ。私も今日ここまで出来るようになるまで二時間はかかったんだからね。」

という風にしぜとココアが言ってきた。

「でも楽しそうだし、一回作らせてよ。」

と言いながら、近くにあった何も書かれていないブラックコーヒーとラテアート用のピックとミルクの入った入れ物を取り出した。

「えっと……確か……」

俺は十年前に祖父がやって見せたのを思い出しながらラテアート作りを開始した。

そして数分後……

「よし、出来た。」

と言って完成したラテアートをココア達に見せた。

すると……

「「えーーーーー!?!」」

三人の女の子は驚きの表情を浮かべた。

「ハ、これは!?!」

タカヒロの叔父さんも（ついでに叔父さんの頭の上に乗っていたティッピーも）目を丸くしている。

コーヒーカーップの中には、目を疑うほどに再現されたローマのコロッセオが描かれて

いた。

「レオ…お前本当に初心者なのか？」

というリゼの質問に、

「おう、初心者だぞ。」

と俺は答える。

「すごい！レオお兄ちゃんどうやったの？」

というココアの質問には、

「いや、昔ラテアートを作ってもらったのを、旅で見えてきたコロッセオを思い出しながら作っただけだよ。」

と返した。

「レオ君は昔から物覚が良くて、手先が器用だったからね。」

と叔父さんが思い耽っている、

「多分、そんなレベルじゃないと思います。」

とチノが答えた。

「ホントにすごいよレオお兄ちゃん！コツ教えて！」

ココアが目を輝かせて頼んできたが、

「ごめん、俺は少し出来るだけで教えられる訳じゃないから……」

さすがに教えるのは難しいと思ひ丁重に断つた。

「いや、これは少しとは言わないだろ。」

リゼが少し呆れ顔で言う。

「でもこれは俺の記憶と感覚だけで作ったから、参考にはならないと思うよ。」

俺がそう答えると、

「逆にすごいよ!」

ココアが大声で指摘した。

その時、「ごほん」と叔父さんがわざとらしい咳払いをした。俺達四人は一斉に叔父さんの方を見た。

「皆そろそろいい時間だし店を一旦閉めようか。それと、失敗したやつもちゃんと処理するように。」

「「あつ……………」」

山のようなコーヒーを見て呆然とする三人組。俺は三人が不敏だと思ひ、
「あ…………俺も手伝うよ。」

と言うと即、

「「是非お願いします!」」

と言われ、いよいよ後に引けなくなってしまうた。

(今夜ちゃんと眠れるかなあ………)

そう思いながら俺は一つ目のコーヒーカップに手を伸ばした。

ちなみに俺の作ったラテアートは、ココアがしっかりケータイのカメラに収めた。

〈 t o b e c o n t i n u e d 〉

order 4 く大いに悩め若人(わこうど)よく

く一時間後く

「や、やつと全部飲み上げたよ」

ココアはそう言っただけだったりした。

「こ、こんなにならないうちを飲んだのは初めてです。」

チノもつらそうな顔で言った。

「私も途中でちよつと嫌になつてきた。」

と言いながら、リゼは苦笑いをする。

「まあ全部同じコーヒーだったからね。無理もないよ。」

と俺は言う。(ちなみに、コーヒーも時間が経つてかなりぬるくなつていた。飲めない訳じゃなかったが…)

すると、二階に行つていたタカヒロの叔父さんが戻つてきた。ちなみにティッピーも一緒だ。

「ようやく片付いたようだね。レオ君もすまないね。手伝つてもらつて。」

「いえ。いいんですよ。コーヒー美味しかったですし。」

叔父さんは申し訳なさそうにしていたが、十年前は、まともに飲めなかったこの店のコーヒーがこうやって美味しく飲めるのは感慨深い。

だが、しばらくブルーマウンテンは飲みたくない。あとこれをペンネームにしている小説家にもあまり会いたくない。

「そうかい。では、俺は今からバーの支度をするから、ココア君とリゼ君は使ったカップを洗っておいでくれるかい？」

と、叔父さんが頼むと、

「はい！」

と言つて二人は席から立ち上がった。俺は二人の素直さに感心していると次に叔父さんは、

「チノはレオ君を部屋に案内してくれるかい？今さつき部屋の用意をし終えた所だから、場所は解るね？」

という風にチノに指示した。チノは少々困惑した様子を浮かべだが、「は…はい。」と言つて渋々了承し、立ち上がった。

俺も今の叔父さんの言葉には驚いたが、同時に叔父さんの考えも読めた。叔父さんは俺とチノのこれからのために、なるべくチノを俺と関わらせようと思つているのだろ

う。

そんなことを考えながら、俺も立ち上がり、チノの後についていった。その前に俺は叔父さんの前に立って、

「あの、今日からまたしばらくお世話になります！」

俺はそう言いながら姿勢を正し、お辞儀をした。

すると叔父さんは何も言わず、目を閉じ、ただ笑みを浮かべながら俺に向かって歩きだした。そしてすれ違い際に俺の肩に優しく手を置いて：

「こちらこそ、”これからチノを頼んだ”よ。」

叔父さんはそれだけ言うと、台所に向かって行つた。

声こそは俺と叔父さんにしか聞こえないほどの小さなものだったが、置かれた手は、娘(チノ)に対する思いが俺の肩の上に重くのし掛かり、かけられた声もまた、俺の中心で力強く響いた。

”あの頃”の俺達に戻ることは、叔父さんの望みであり、”あの人”の望みでもあるから……

「……はい。」

俺は振り返らずそう答え、階段を登り始めたチノについていった。

その時、突如背後から鋭い視線を感じ、後ろを振り返って見ると、そこには誰もいな

かった。

(気のせいかな?.....)

俺はそう思いながら、また歩きだした。しかし、俺は気づいていなかった。扉の影から殺気だった目で俺を睨み付けていた、ティツピーの姿を.....

「.....」
「.....」
「.....」

「……………」

（間がもたない…。）

お互い無言な中で、部屋まで案内してくれてるチノの後をついていっている中、俺はそう心の中で呟いた。

思えば、俺とチノはお互いのことを知ってから一言も言葉を交わしていなかった。ラテアートのコーヒーを飲んでいる時も、ココアとりゼはいろいろと話しかけてくれたり、俺自身も二人に話しかけたりしていたが、チノとは全く会話をしていなかった。

俺の理由としては、解らなかつたからだ。チノは俺のことを覚えているのか、覚えていないのか、それとも思い出したのかどうなのか全く解らない。

もし、覚えている、あるいは思い出したのなら、「約束」を思いつきりすっぽかした俺の対応に困っているのか、いや、もしかしたら、そんな俺とは話す価値もないと蔑んでいるのかもしれない。ホントにもしそうだつたらどうしよう…。これからちゃんと向き合おうと思っていたのに、序盤からこれじゃあ先が思いやられー

「あの、どうしたんですか？」

「えっ…………？」

ふと顔を上げると、またも心配そうな顔で俺を覗き込んでいるチノがいた。チノが俺のことを知ってから話しかけてくるのは初めてだった。

「どうやら俺はずっと考え込んでいて、いつの間にか頭を抱えてうずくまっていたようだ。俺は慌てて立ち上がり、右手で髪をかきながら軽く笑いながら、

「いや、何でもないよ。」

と、優しい口調で答えた。

「本当に大丈夫ですか？」

チノは尚心配そうな顔で言ってくる。

（まあ、はたから見たら変な風に見えるよなあ。）

そう考えながら頭の中で苦笑いするも、心配してくれたチノには、言うべきことを言わなければならない。

「本当に大丈夫だよ。……ありがとう。心配してくれて。」

（“ごめん”ではなく、“ありがとう”と言おう。）

これは、俺が旅の中で得た教訓の一つだ。

人は謝ってもらうより、感謝された方が嬉しく思えるのだ。（ただし、謝る時はちゃんと謝ろう。）

すると、チノが突然後ろへ向き直り、「そ、そうですか……」と少し暗めの声で言ってきた歩きだした。

（えっ!?俺なんか気に触る様な事言った?）

やっとまともに会話ができたと思ったのに、もし何か怒らせることを言ってしまったのならばとてつもなく不味い。ここは謝っておくべきか？いや、その前にどうしたのか聞いておくべきかもしれない。旅をしていた時はいろんな人と気軽に話せたが、チノに関しては、その人達とおんなじ風に扱って良いわけがない。どうしたら――

(ホントに大丈夫なんでしょうか?)
再びうずくまっている俺を見て、チノはそう考えた。

〈食器洗い side〉
一方、リゼとココアは使ったカップを洗っていた。リゼが洗剤でカップを洗って、ココアがそれを拭き取っていた。半分ほど片付いた時、

「ねえリゼちゃん。」

突然ココアが話しかけて来た。

「ん？」

リゼは軽く反応した。他愛もない話題だろうと思っていた彼女の予想は次のココアの一言で、裏切られることになる。

「レオお兄ちゃんってカッコいいよね！」

「!!!
!!!
!!!」

リゼは思わず持っていたカップを滑らせ、カップは中に舞い、床に落下しそうになった。

「あわわわわわわ！」

慌てて掴もうとするも手も洗剤の泡まみれでうまく掴めない。4、5回ほど手から滑らせるが、なんとか両手でキャッチしひとまずホッと一息置くが、

「いきなり何言い出すんだ！びつくりしただろ！」

すぐさまココアを怒鳴る。

「えへへ♪ごめん、ごめん。」

笑いながら謝るココアに、リゼはやれやれとため息をつく。しかし、先ほどのココアの発言が蘇りリゼは再び顔を赤くした。

「そ、それで、どうしてそんなことを聞くんだ？／＼／＼」

リゼがココアにそう質問すると、

「だってステキな人だと思わない？優しくて、話しも面白くて、なんかすぐくて、一緒にいてとつても楽しいもん。リゼちゃんはどう？」

「……………」

リゼは押し黙った。なぜなら自分もレオに対しココアと同じく、何かしら印象を持っていたからだ。だが、リゼの印象はココア以上だった。

「俺はリゼと友達になりたいんだ。」

「これからよろしく、リゼ。」

彼に笑顔でそう言われ、手を差し出して来た時、自分の中にある“何か”が大きく弾みだし、体が見るみる熱くなっている感覚を覚えた。しかし、これが一体何なのかリゼには解らなかつた。しかし、これは決して誰かに晒してはいけないことだけは本能で理

解できた。少なくとも、彼だけには絶対に——「…ちゃん。」

「リゼちゃんってば!!」

「うえっ!!」ビクッ！（二度目）

ココアに大きな声で名を呼ばれ、リゼは我に帰った。しかし、今度はカップを滑らせることはなかった。というのも、

「どうしたのリゼちゃん？流し台がすごいことになってるよ？」

「えっ……あつ。」

気がつくと、流し台が泡でいっぱいになっていた。どうやら考えるのに夢中になって、無意識にカップを洗っている内に洗剤の泡がとてつもないくらいに立ち込んでしまったようだ。手首から先が泡に飲み込まれて見えなくなっている。

「ど、どうにかしないとな。」

というリゼの言葉に、

「うん。そうだね。」

と、ココアは答える。

その後、なんとか流し台の泡を片付け、カップ洗いを再開した。

「それでリゼちゃんはレオお兄ちゃんのことどう思ってるの?」
「結局それを聞くのかよ!!」

↳ t o b e c o n t i n u e d ↳

order5 くツキングマスターレオく

レオ&mp;チノside

「はいです」

と言い、チノは二階の奥の部屋のドアノブに手をかけ、扉を開けた。

「どうぞ？」

チノはそう言つて俺に部屋へ入るよう勧める。俺は恐る恐る部屋に入ると、思わず息を呑んだ。

「はい、これは…」

部屋には、整えられた立派なベッド。仕事をするには十分すぎる机。部屋の中央には段ボールがあり、部屋に入つて中を調べると、中身は俺が一週間前に送つた仕事で必要な資料（後に詳しく説明する）が入つていた。顔を上げ、再び辺りを見回すと、部屋の隅に高さを変えられる大きな本棚が数個置いてあつた。

「す、すい…」

全部叔父さんが俺の為にわざわざ用意してくれたのだろう。叔父さんのおもてなしに俺は感激せざる得なかった。すぐに叔父さんにお礼を言わねばと、俺はとりあえずリュックとキャリーバック部屋の中に置き、電気を消して、部屋のドアを閉めた。すると、扉の前でチノが真顔で俺のを見て立っていた。俺は一瞬驚いたが、まずはこの子から叔父さんについて聞いておこうと思ひ、

「あれ、叔父さん…君のお父さんが全部用意してくれたの？」

「はい、そうです」

「そっか、なら今すぐ叔父さんの所に行ってお礼を言わないと」

そう言つて、俺は一階に向けて歩きだし、2、3歩ほど歩いた時背後から、

「あ、あのー」

突如呼び止められた。声の主はチノであることは分かったが、何のきっかけもなくチノが俺に話しかけて来たのは初めてだった。

「私達、昔会ったことがあるんですよね？」

しばらく間を置いて放ったチノの言葉に俺は内心激しく動揺し、足を止めた。

「あ、ああ…そうだよ」

俺は振り返らずそうなんとか答える。動揺している様子をチノに見られたくないの

もあるが、昔を話しをしてきたチノに俺は顔向けできなくなった。もしかしたらチノは十年前のこと思い出したのかもしれない。もし、そうだったとしたら…

「あの…昔、あなたのことを…」

俺は息を吞んで次のチノの言葉を待った。

”チノが過去のことを思い出す”

いずれその時が来ると覚悟はしていたが、会って一日も経たずに来るとは思っていなかった。心の準備が完全にできた訳じゃないが、どんな言葉も受け止めるつもりだ。

今まさに、チノは昔のことの思い出して……

「私は、どう呼んでいたんですか？」

「……いかなかったようだ。」

俺は「えっ」とあつげにとられ、思わずチノの方を振り向いた。チノは、顔を若干赤らめ、どこかもしもじしていた。この言葉を言うのにかなりの勇気を出したのだろう。しばらくするとチノは続けて、

「私、昔のことをよく覚えていないんです。だから、あなたのこと何て呼んでいたのかも思い出せなくて……」

ありがたいことに昔のことを思い出していないことも教えてくれた。

（チノが昔俺のことをどう呼んでいたのか、か……）

チノの質問に俺はある迷いが生じた。”チノに昔のことを教えるべきか、否か。”彼女に昔の呼び方を教えるということは彼女に過去の一部を教えるということ。俺は、チノが混乱することを恐れて、全てを話すことができない。最悪な結果を避ける為にはチノ自身が思い出すしかない。が、一部を話せば思い出すきっかけにはなるかもしれない。だが、それでも俺は迷った。この俺にチノが昔の呼び方で呼ばれる”資格”はないからだ。しかし、俺とチノはいずれ、互いに過去と向き合わなければならぬ。どう呼ばれていたのかを教えるのは、そのきっかけになるだろう。でも……

「…チノ」

「は、はい」

迷いに迷って、俺は緊張しているチノの前に立ち、中腰になり、チノとほぼ同じ目線になって言った。

「別に昔に合わせる必要はないよ」

「えっ…?」

予想もしていない答えが帰って来て困惑しているチノに俺は続けて、

「昔は昔、今は今だ。無理して昔のことにこだわることはないし、俺に気を使おうとしてるつもりなら、その必要もないよ。チノが呼びたいように呼んでかまわない。でも、どうしても昔の呼び方がいいのなら教えるけれど…どうする?チノが決めなさい」

「……………」

チノは黙ってうつむいた。

俺は内心、最低だと思った。結局俺は、自分ではどうするか決められずチノに決めさせてしまった。それに、過去のことに関わっている俺が何を言っているんだ。矛盾しているじゃないか。自分の優柔不断さと情けなに自己嫌悪していると、チノが口を開いた。

「…それじゃあ、あの…」

頬を赤らめ、困惑したチノを見て、やつぱりチノに決めさせるべきじゃなかったと後悔したが、なんと呼ぶかを決めた様だった。

「…レオさん…でいいですか？」

「……………」

(…レオさんか…)

昔の呼び方とは違うが、俺にはもう「あの呼び方」で呼ばれる資格はないし、チノの好みに呼ぶように言ったのは俺だ。嫌と言う理由はないし、気に入ってない訳ではない。

「ああ、それでいいよ。改めてよろしくな、チノ」

「こちらこそ、よろしく願います。レオさん」

俺達は、はじめて互に笑みを向けた。

「叔父さん、ありがとうございます。あんな立派な部屋を用意してくれて」

「礼には及ばないよ。むしろ、あんな狭い部屋ですまないと思ってる。だからせめて、見映えは良くしようと思つて色々揃えて見たんだが……」

「そんなことはありませんよ。とてもいい部屋でした」

「ほかにも何か必要なものがあつたら言いなさい。遠慮はいらないよ」

「今は大丈夫です。ありがとうございます」

俺はその後、バーの支度をしていた叔父さんの下へ行き、お礼を述べた。叔父さんは申し訳ないように言っているが、俺にとっては感謝極まりないことだった。一方チノはというと、ココアとリゼがまだ食器洗いを終えていなかったので二人の手伝いに行つた。そう言えば、リゼの顔が少し赤かつたような気がしたが気のせいだろうか？とにかくお礼も言つたし、俺もココア達の手伝いをしようとキッチンに向かつたが、

「なんだ、もう終わつたのか？」

「あつはい、今終わりました」

キッチンに入つた時には、ココア達はすでに洗いものを終えていて、食器棚には大量のコーヒーカーップが置いてあつた。

「ん〜っ！、それじゃあ今日はこれで終わりだね！お疲れ様！」

「ああ、お疲れ様」

背伸びしながら言うココアの言葉にリゼが答える。ふと、俺はキッチンにあった時計を見た。時刻は7時半を回っていた。

「もうこんな時間か…」

俺がそう言うと、ココア達も時計を見出した。

「あつ、ホントだ」

「もう夜ですね」

そう二人が言い合っていたその時、

グウ~~~~~

「「……………」」

「……………」カアアア

なんとも可愛らしい音がキツチンに響いた。俺とココアとチノが沈黙している中、一人顔を赤らめ、さっと腹部を押さえているリゼに俺達は視線を向けた。その視線に気づくとさらに顔を赤くし、慌てふためいた顔で、

「ちっ、違う！私じゃないぞ!!」

「俺達まだ何も言っていないぞ」

「あっ……うう……」カアアア／／／

咄嗟に反論したがそれが仇となり、俺が返した言葉にもう言い訳ができなくなったりは、ますます顔の赤色に色が増し、ついにはしゃがみこんでしまった。

「まーまーリゼちゃん。そう恥ずかしがることないよ。私だってお腹空いたもん」

とりゼの肩を軽く叩きながら慰めるココア。しかし、それはかえってリゼの傷口を広

げることとなり、ついに耐えられなくなったのか、バツと立ち上がったかと思うと、
「きつ着替えて来る!!」

と言つて、高速でキッチンを抜け、隣の更衣室へ駆けて行つた。

「ありやりや」

「逃げちゃいました」

「まあ当然だよなあ」

等々言つた後チノが、

「でも確かに、そろそろ夕食の支度をしないといけませんね。私がしますので、ココアさんも着替えて来て下さい」

「えー、私も手伝う!」

「制服でしたらココアさん絶対汚しますし、料理も失敗しますので結構です」

チノの鋭い反論にココアはめげず、

「だいじょくぶ!お姉ちゃんに任せなさい!」

と言い、ウインクしながら曲げた右腕は肩まで上げて袖をまくり、左腕でその腕の上腕二頭筋の部分をガツシリ掴むというポーズをとつたがチノの表情は変わることはない、

「任せられません」

「ヒドイ!!」

涙目でショックを受けているココア。俺はやれやれと思いつながら、二人にある提案をした。

「じゃあ二人とも着替えに行くといいよ。俺が夕食を作るから」

「えっ!?!」

と言つて、二人ともあつげにとられた顔をした。

「何言ってるんですか! レオさんはお客様なんですから、そんなことさせられませんよ」
と遠慮するチノに、

「いや、俺はお客様じゃなくて、しばらくお世話になる居候者だよ。だから何かしらご奉仕しないといけないと思うからね。料理なら俺もできるし」

「でも、今日来たばかりで疲れてない?」

というココアの質問に、

「全然大丈夫だよこんなの。旅している時に比べたら大したことないよ」

「えっ、レオお兄ちゃんつて旅してたの?」

ココアが驚いたように言つた。

「ああ、言つてなかったね。…まあそうだよ。外国を取材するために世界中を旅していたんだ」

「へえーすごい!!ねえねえ、レオお兄ちゃんの旅の話聞かせてよ」

ココアの目が輝かせて言った。

「ああいいよ。夕食をしながら話そうか。準備をするから、その間にチノと着替えて来るといいよ。良かったらリゼも誘って来てくれ」

「うん分かった!行こうチノちゃん!」

「えつちよ、ココアさん!」

純粹なのか素直なのか、ココアはチノを引つ張つてキッチンを出ようとした。

(まんまと乗せられたな…)

なんとか上手いこと言つて、俺が料理をする流れに持つて行けた。俺自身、何かここ出来ることしなければ、ただ食べて寝るだけなんて無神経なことではできない。

チノも最初は抵抗したが、「仕方ないですね…」と言つてそのままココアに連れて行かれた。キッチンを出る際、チノは申し訳なきように俺を見て、

「…それじゃあよろしくお願いします。材料は好きに使つてかまいませんので」

「ああ分かった、楽しみにしてくれ」

と言つて笑みを見せると、チノも少しは気が軽くなつたようで、こちらにも笑みを返し、ココアとキッチンを出ていった。

「…さて」

俺はキッチンを見回して、まず冷蔵庫の中を見た。

「大体の材料はあるな」

そして、あちこち見てみると”ある物”を見つけた俺は、今晚の献立を決めた。

「よし、やるか」

数十分後、

「うわー！いい匂い！」

料理の工程も中盤に差し掛かった時、ココア達三人が私服に着替えてキッチンに入ってきた。するとリゼが困惑した顔で、

「い、いいのか？私までごちそうになつて…」

「ああ。皆で食べた方が楽しいだろ？それに音が出るほどお腹を空かせたりゼを放つて

置けないからね」

「うう…」／／／

塞ぎかけていた傷口がまた開き始め、今度は羞恥に満ちた表情を浮かべた。

「あの…何かできる事があつたら言つて下さい。手伝いますので」

とチノが言つてきた。

「ありがとう。じゃあどこで食べようか？」

「二階にリビングがありますのでそこで食べましょう」

「あれ？ そうなの？」

俺はさつき二階に上がった時は自分の部屋しか見ていないため、他は全く知らなかった。…いや、”忘れてしまった”と言うべきか…

「そっか、分かった。じゃあチノとココアは二階に行つて食器とかを並べてもらおうか」

「はい、分かりました」

「行こつ！ チノちゃん！」

勇んで駆け出すココア。

「ココアさん。走つたら危ないですよ」

その言いながらチノはその後をつける。

「リゼはここで洗つた野菜を切つてくれ」

「ああ、任せろ」

リゼはそう言つて包丁を持ったその時はととした。

（あれ？今私、レオと二人つきり…つて何考えているんだ私は!!私に別レオとそんな関係じゃ…）

そこまで考えるとリゼは思わず顔を大きく左右にふる。

（ええい！早く切つてしまおう…）

とやけになりながら包丁を握りしめ、目の前のレタスを凝視する。

その様子を見ていた俺は、

（何かレタスに恨みでもあるのか？）

と、思わずにいられなかつた。

「…よし。完成だ」

「おお…」

そう言いながら、フライパンの中を覗くリゼ。すると、

「ねえねえ、もう出来た？」

ココアが気になってキッチンに入って来た。

「ああ、準備できたから、ココアはこのサラダ運んでくれないか？」

俺はテーブルに置いておいたサラダのボールをココアに差し出した。

「うん！分かった！」

ココアはすぐさまサラダを受け取って、またキッチンを出ていった。

「さて、後はこのフライパンと鍋なんだけど…」

「ああじゃあフライパンは私が持って行くよ」

と、リゼは言い出す。

「えっ、大丈夫か？火傷するなよ」

「大丈夫だって。親父に色々鍛えられたからな」

リゼはそう言って、フライパンを持ち上げ、キッチンを出ていった。俺は最初は不安だったが、リゼの言った通り大丈夫そうだったので俺も鍋を持ち上げて、リゼの後について行った。

(そう言えば、リゼの家って一体どんななんだ?)

その疑問が俺の頭から離れなかった。

「夕飯だぞ〜」

「お待たせ」

そう言いながら、リゼに続いて俺も二階のリビングに入り、リビングのキッチンにそれぞれ鍋とフライパンを置いた。

「わーい！早く食べようよ！」

「焦らなくても、夕飯は逃げないよ」

俺は、早く食べたがっているココアを宥めながら、皆で皿に装ったり、おかずを運んだりするなどして、夕食を準備は着々と…

「そう言えば、さつきチノちゃんのお腹の音が鳴っていて、可愛かったんだよ〜」
「ココアさん!!それ言わないでって言ったじゃないですか!!」

「良かったねリゼちゃん、仲間が出来て」

「ココア！頼むからもう掘りかえさないでくれ！」

「……………」

進んでいったと…思う。

「それじゃあ、いただきます〜す！」

「いただきます」

ココアに続いてチノとリゼが手を合わせて言った。

「ああ、召し上がれ」

俺がそう答え、この街での最初の夕食が始まった。

「美味しそうだね〜」

「すごくいい匂いがします」

「…食べてできれば感想を聞かせてくれるか？」

「ああ、じゃあいただくよ」

三人はまず、主食であるスパゲッティをフォークで絡め取り、口に運んだ。

「どうだ？悪くはないと思うんだが…」

「うん!!すつごく美味しい!!」

「本当か？良かった」

「ココアの言葉に俺はひとまず安心した。

「ああ、本当にうまい！こんなうまいスパゲッティは初めて食べた！」

「いや、そこまで大袈裟なものじゃないけど…」

リゼからの太鼓判に、俺は謙遜した。

「そんなことないです。とつても美味しいですよ。」

「そ、そうか？なら、良かったよ。」

皆から絶賛され、俺も素直に嬉しくなった。

「私が今まで食べたスパゲッティとは何か違うな、どうやって作ったんだ？」

「正確には、”スパゲッティ・ボロネーゼ”。まあ別名”ミートソース”って言うんだけど、そつちの方が分かるかな？」

リゼの質問に俺はそう答える。材料を見て回つた時、俺はスパゲッティの麵を見つ
け、今回の献立を決めた。

「えっ？でも、私知っているミートソースとは何か違うような…」

ココアがフォークでスパゲッティを持ち上げ首を傾げた。

「多分、ココアが言っているのはスパゲッティの上にミートソースをかけたやつ事だろう？これはイタリア流のミートソースで、スパゲッティとミートソースをフライパンで混ぜるんだ」

「へえ、そうなんだ！」

ココアが何かと興味津々に聞いてくる。

「あの、この黄色いのって何ですか？」

チノがスパゲッティに乗っている黄色い粉状のものを指して言った。

「ああそれは、粉チーズだよ。隠し味に入れたんだ」

「そうなんですか、とつても美味しいです」

「それは良かった、ありがとうチノ」

「…っ！」ドキッ

俺がお礼を述べた途端、”何故か”チノは顔が赤くし、俺から顔反らした。

(どうかしたのかな?)

俺がそう疑問に思った時、

「このシチューとサラダもすっごく美味しい！」

ココアが声を上げてそう言ってきた。するとリゼも、

「ホントだな、どれも負けてない」

「あはは、褒めすぎだよ」

「ここまでベタ褒めされるとさすがに照れる。」

「ねえレオお兄ちゃんつて、どうやってこの料理を覚えたの?」

「このスパゲッティは、イタリアに居た時に教えてもらったんだ」

「えっ、イタリアで!?!」

ココアが目を丸くすると、テーブルに手を置き、全体重を乗せてこう言ってきた。

「ねえねえ、その時の話聞かせてよ!」

「私も聞きたいな、その話」

「私も聞きたいです」

ココアに続いてチノとリゼもそう言ってくる。

「分かったよ。旅の話しを聞かせる約束だったしね」

俺はあの時を振り返るような表情でイタリアでの思い出を語った。

「……そう、あれは今から1年と半年前、様々な国渡り歩き、イタリアにたどり着いた俺は……」

行き倒れていた。

「「えっ?!」」

「to be continued」